

地域で暮らす人々から、お話を聞く。 視野を広げる、独自の实習です。

看護師の役割は、患者さんが望む生活ができるようにサポートすること。しかし、「患者さん」と捉えては、その人の思いに寄り添うことはできません。もともとその人には、地域社会での暮らしがあるからです。本学看護学科では、「人々の暮らしを理解する実習」を実施。目的は科目名のとおりで、地域で暮らす人々へのインタビューなどを行います。同科目の実施において中心的な役割を果たした明野聖子講師に、詳しくお話を伺いました。

1年次から、体験の機会を。

本学科では、2022年度から新カリキュラムがスタートしました。多様な文化や価値観を尊重した看護が必要とされる中、深い思考力、広い視野、自由な発想でニーズに応える専門職を養成するためです。

「人々の暮らしを理解する実習」は、暮らしの場を問わず、あらゆる健康状態の人々への看護を考えるための基盤を培うために誕生しました。夏季実習5日間、冬季実習(2024年2月予定)5日間の計10日間にわたって実施。札幌市拓北・あいの里地区や当別町で暮らす人々に、暮らし方や価値観についてインタビューを行います。実習開始時から報告会まで、4人ほどのグループ単位で取り組みます。

また、1年次から体験の機会を設けることには大きな意義があります。早い段階からコミュニケーションを磨き、人々の暮らしを尊重する視点を持つことで、さまざまな暮らしをイメージし、その人に合った看護を考える学びの積み重ねが期待されます。

この度は、2023年8月28日から9月1日まで実施された夏季実習の報告をさせていただきます。

生活者の視点で、歩いてみる。

1日目と2日目は実習の導入。まずは、本学教員の講義です。暮らしは、家族、歴史、地域社会の文化や環境などさまざまな要素で構成されていること、そして、一人ひとりの価値観を尊重することが重要であることを伝えました。また、「自分自身の暮らしを振り返る」という事前課題をグループで共有。同じ学生同士でも、暮らし方は一人ひとり異なります。多様性を受け止める必要性を実感してもらえたと思います。



まちづくりセンターの職員による講義。

また、地域の保健師、まちづくりセンターや社会福祉協議会の方々などにも講義をご依頼しました。車での移動が中心のため運動不足の人が多いなど健康面の特徴から、地域の人々同士での支え合いの活動紹介まで、貴重なお話を伺いました。

講義だけではありません。インタビューの対象者が暮らすエリアを実際に観察する、地区踏査も実施。スーパーまでの道のりや、病院の場所などを確認しながら、自分たちの足で、かつ、その人の目線になってイメージを広げます。道端の花壇がきれい、歩道が歩きにくい、車がないと不便など、気づいたことはインタビューを行う上でも重要なヒントに。誰かの立場を想像しながら歩くことで、多くの発見があったようです。

さまざまな学びを経て、各グループでは質問内容をまとめていきます。対象者に関する情報は、お住まいの場所、年代、お名前のみ。全員が想像をふくらませ、シミュレーションをしていました。

何にも替えられない、実体験。

3日目はよいよ、インタビューです。場所は、地域の会館、地域福祉ターミナル、その人のご自宅など。学生が直接会いに行き、主体的にインタビューを進めます。マナーや言葉遣いなど気をつけたいことも、学生自ら考えて準備をしました。

インタビュー時間は60～90分程度。対象者はお話が好きな人ばかりで、学生たちの緊張はすぐに解けていきました。質問の内容は、健康状態や家族構成、地域社会とのつながりなど。今までの暮らしのこと、その地域の良い点や不便な点なども聞いていきますが、プランどおりに進むとは限りません。質問の順番を変えたり、追加で聞きたいことを聞いたり、会話の流れに沿って臨機応変な対応が必要です。大切なのは、相手のことを尊重し、教えていただくという姿勢。コミュニケーションのあり方を学ぶ有意義な機会になったはずです。

インタビューを終えて教室に戻ってきた学生たちは、生き生きとした表情、高揚した声で報告してくれました。自分とは異なる価値観に触れて「視野が広がった」と喜ぶ学生も、健康意識の高さに「私ももっと勉強しなくちゃ」と刺激を受けた学生もいました。また、地域で暮らす人々のていねいな接し方は、いいお手本になったようです。

看護福祉学部看護学科 講師

明野 聖子

本学看護福祉学部看護学科卒業。同大学院看護福祉学研究所看護学専攻修士課程修了。厚真町役場総務民生部保健福祉課健康支援係保健師などを経て現職。専門分野は公衆衛生看護学。主な研究テーマは、乳幼児期の母親の育児支援、妊婦期の父親の支援など。



地域で暮らす人々に学生がインタビュー。

教科書よりも、その人の言葉。

4日目は、実習報告会に向けて準備を行いました。講義や地区踏査など実習初期に学んだことからインタビューまで、自分たちが見たことや聞いたこと、思ったことを自由な形式でまとめます。「聞いたお話があり過ぎて困っています」などと冗談をいしながら、楽しく取り組んでいました。

最終日は実習報告会。インタビューの対象者が各グループで異なるため、発表内容もバラエティ豊かでした。とくに良かった点は、義務的な報告ではなく、自分たちが伝えたいことを率直に発表してくれたこと。たとえば、「病気や怪我によって、今までの暮らしができなくなる」。教科書にも書いてある内容ですが、実際にそんな経験をした人の言葉を通して理解が深まったことがわかりました。

冬に向けての、サプライズ。

本実習には、続きがあります。5日間の冬季実習です。北海道では季節によって人々の暮らしが異なるということを理解するために、もう一度インタビュー。対象者になってくれるのは、夏と同じ人々です。今回のインタビューが終わった後、学生たちにそのことを伝えると、喜びの歓声が響きわたりました。その人に再会できることが、学びのモチベーションになってくれたらうれしいです。

また、本実習後も、2年次「地域在宅看護学」、4年次「人々の暮らしを支援する実習」など、暮らしの場を問わず、あらゆる健康状態の人々への看護を考え創り出す力を育む体系的なカリキュラムを展開。人々の暮らしや健康への理解を深め、実践力を高めていってほしいと思っています。